

和歌山県知事指定郷土伝統工芸品

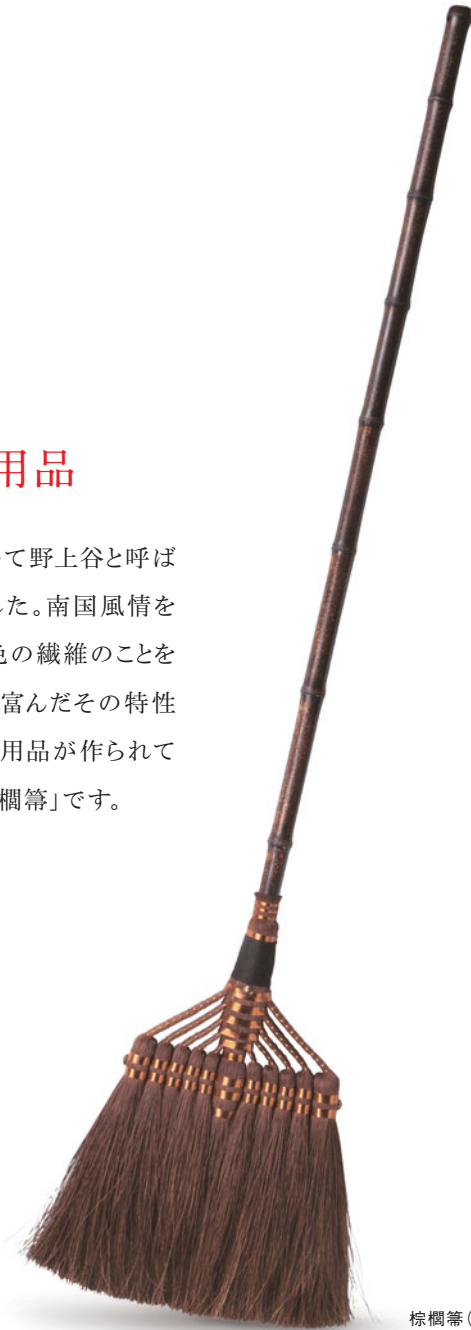
しゅろぼうき

棕櫚箒

平成16年指定／指定された地域(紀美野町)

根強い愛用者に支えられる日用品

紀の川の支流にあたる貴志川の清流沿い。かつて野上谷と呼ばれた地域の山間に、棕櫚の木が栽培されていました。南国風情を感じさせるヤシ科の植物。この木の幹を包む暗褐色の繊維のことを棕櫚皮といい、丈夫で腐りにくく、弾力性と耐久性に富んだその特性から、縄や網をはじめ、タワシやブラシなど多くの日用品が作られてきました。その一つが、今も根強いファンを持つ「棕櫚箒」です。



棕櫚箒(鬼毛箒)



桑添勇雄商店
● 棕櫚箒職人
桑添 勇雄さん

昭和3年生まれ、旧野上町出身。先代が棕櫚ロープづくりの職人で、戦後23歳から跡継ぎとしてこの世界へ入りました。棕櫚ロープの衰退から箒づくりへと転身。日用の棕櫚製品工房へと通い技術を修得。「技は盗むもの。父からも直接指導されたことはない。見て考え実践し、失敗を繰り返して体に叩き込むものだ」と。キャリア60年を超えるベテランも同様に、言葉ではなく目で盗ませ、技を後継者に伝えています。



桑添勇雄商店
● 棕櫚箒職人
桑添 俊彰さん

勇雄さんの実子で後継者。昭和29年生まれ。サラリーマンから一転して職人の世界へ。転職機は56歳の時。高齢になった勇雄さんの手伝いから始まりました。「生家でありながら、この世界に入って改めて大変さを知りました。父のそばで、見て盗むのが修業。ようやく一通りの作業が身に付いただけで、技術はこれからです。」現在、力仕事はもっぱら俊彰さんの役割。一本一本に、技と思いを込めます。

鬼のように丈夫で長持ちする箒

昔ながらの手法で作られる地場の工芸品「棕櫚箒」。種類としては2種類あり、鬼毛箒と皮箒に分類されます。原料はどちらも棕櫚の樹皮。耐久性と弾力を併せ持ち、植物性の油脂を多く含んでいることから水にも強く、丈夫で長持ち。皮箒は木から剥いだ皮をそのまま丸めて束にし、穂先から半分程をほぐして掃きやすくしたもの。一方、鬼毛箒は皮の両端に数本ずつある繊維のみを使った箒。まさに鬼の毛のような剛毛さに、しなりとコシを兼ね備え、その丈夫さは“一生に3本あれば事足りる”といわれるほど。鬼毛の貴重さと、一本一本の繊維を束ねることができる職人の減少とともに、希少な存在になってきています。

全国で普及した代表産業のひとつ

古くからこの一帯では、棕櫚の特性を生かした道具づくりが盛んで、漁業用の網やロープをメインに、紀州産の棕櫚製品が全国で使われていました。ところが戦後、ナイロンロープが主流になると需要が激減。ナイロンロープの製造に移行する人、または箒やタワシなどの生活用品にシフトする人と、転換の時代を迎えます。棕櫚箒職人の桑添勇雄さんは、その変動期の真ただ中にいた職人のひとり。「昔は7、8軒の工房があり、棕櫚も良質のものが栽培されていました。しなやかで色が良く、艶があつてね。」現在、桑添さんを含め職人は6人程度。鬼毛箒を作れるのはその中でも一部のだけだと言います。



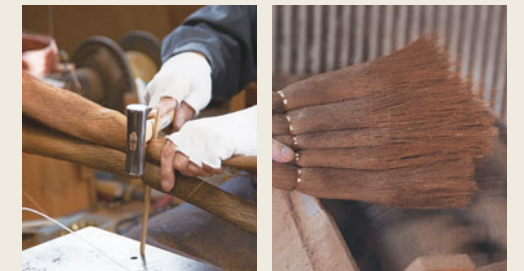
耐久性があり床を傷つけない

最高級と呼ばれる棕櫚箒は、両手で持つ長柄の鬼毛箒11玉。エナメル銅線で芸術的に束ねた玉を、芯となる親玉に沿わせ一つ一つ合わせていきます。箒のサイズは長柄箒のほか、少し腰をかかめて使う手箒、神棚などに用いる荒神箒・小箒の3種類。生活様式の変化やフローリングなどの普及で箒自体のニーズは低下しましたが、棕櫚箒を愛用する人にとっては欠かせない日用品。棕櫚箒は、掃除機などに比べて使いやすく、静かなうえ、床面に柔らかく当たるため、使うほどに畳やフローリングを磨くとされています。手仕事を好む若い人にも見直され、関東圏や京都でもファンが増えています。

【棕櫚箒の制作工程】



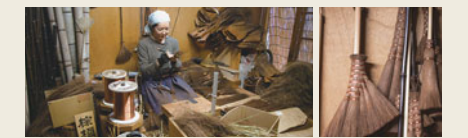
戦前は山間部一帯に棕櫚山があり、山師が管理していたといえます。現在、地元産の棕櫚はほとんど手に入らず、原料は中国から輸入。
棕櫚の皮全体を使う皮箒。まずは樹皮を丸め、玉と呼ばれる棕櫚の束を作ります。玉の位置や箒の種類で硬さを変え、銅線や糸で固定。



親玉に柄を取り付け、竹串を突き刺し、続いて玉を刺していきます。5、7、9、11と種類や用途に応じて玉数を変更。11玉が高級品。
棕櫚毛捌き機を使って毛先をさばき、種類によっては角度を付けて先端をカット。掃き心地が柔らかく量にもフローリングにも最適。

日常を豊かにするデザインの美

桑添さんの弟子の一人で、平成24年に独立した西尾香織さん。昭和51年生まれ、広島市出身。旅行で訪れた和歌山に魅了され、勢いそのまま移り住み、グラフィックデザイナーとして活躍。和歌山のことを調べている時に本で棕櫚箒のこと、桑添さんのことを知り、弟子入りを志願。門を叩いた翌日には、師匠の隣に座っていました。「棕櫚箒に惹かれたのは、機能美。単なる日用品ではなく、日常を豊かにする実用的で完成されたデザイン。後継者不足の記事を読み、受け継ぎたいと強く心に思いました。」師匠の指導は見ても盗め。当然、西尾さんも例に漏れず、渡された見本を手に入らずに玉を作り続けました。「20年、30年と使い継がれる箒に手は抜けません。鬼毛箒は2日に1本が限界。」西尾さんの箒はネット販売のみ。



伝統を受け継ぎつつ、洋間にも合う棕櫚箒を提案。使って愛されるものを目指し要望にも応えます。